



すぐそこに潜む異世界

- 虫と小鳥の奇妙な生態への招待 -



第10回 京都大学生態学研究センター シリーズ公開講演会

平成31年2月9日[土]
13:30 ~ 16:00

[主催] 京都大学生態学研究センター

地球上には、多種多様な生きものたちがたくましく生きています。私たちの暮らしのそばでも、ちょっと目を凝らすと、生きものたちのユニークな営みを見つけることができます。人と異なる起源・歴史を持つ生きものたちの異世界とその驚きの生態、これらがどのように解き明かされたかを、発見者自身によるご案内とともにお楽しみください。

場所

大学コンソーシアム京都
キャンパスプラザ京都第4講義室

入場
無料

プログラム

- 13:30-13:40 「趣旨説明」谷内 茂雄／京都大学生態学研究センター
- 13:40-14:20 「花の性別を見抜ける昆虫-ソトシロオビナミシャクとヒサカキの花-」辻 かおる／京都大学生態学研究センター
- 14:20-15:00 「農耕する昆虫-ニホンホホヒロコムツキモドキと酵母の深淵な関係-」土岐 和多瑠／名古屋大学大学院生命農学研究科
- 15:00-15:10 休憩
- 15:10-15:50 「言葉を持つ鳥-シジュウカラ-」鈴木 俊貴／東京大学大学院総合文化研究科
- 15:50-16:00 全体の質疑



【お問い合わせ】 ☎520-2113 滋賀県大津市平野 2-509-3 京都大学生態学研究センター／谷内 茂雄

TEL 077-549-8257 FAX 077-549-8201 E-mail yachi@ecology.kyoto-u.ac.jp

すぐそこに潜む異世界-虫と小鳥の奇妙な生態への招待-

第10回 京都大学生態学研究センター シリーズ公開講演会

講演01



花の性別を見抜ける昆虫 -ソトシロオビナミシャクとヒサカキの花-

辻 かおる／京都大学生態学研究センター

ヒサカキという樹木は雄木と雌木があります。この花の蕾を食べるソトシロオビナミシャクという蛾の幼虫は雄木でのみ観察できます。なぜ雌木に幼虫はいないのでしょうか？幼虫に雌の蕾を与えると、数個の蕾を食べた後に99.8%が死亡しました。雌の蕾には化学防御物質が多く含まれ、幼虫が死んだのは、この強い防御によると考えられます。さらに、この蛾は幼虫が利用できる雄の蕾を選んで産卵します。この賢い行動は、ヒサカキの蕾を利用するための適応として進化したようです。また、蕾が開くと、他の様々な昆虫が訪れ、彼らは花蜜に菌や細菌を持ち込みます。今日は花の性別に着目しながら、昆虫や花、微生物の生き生きとした世界の一端を紹介したいと思います。

講演02



農耕する昆虫 -ニホンホホビロコメツキモドキと酵母の深淵な関係-

土岐 和多瑠／名古屋大学大学院生命農学研究科

我々人間は農耕を行い、穀物や野菜を糧として繁栄しています。作物を植え、育て、守り、収穫して食べます。面白いことに、「農耕」は人間の専売特許ではなく、昆虫にも見られます。昆虫において、「作物」となっているのは菌類なのですが、彼ら昆虫類はどのように「作物」を栽培するのでしょうか。本講演では、タケの中で酵母菌を栽培するニホンホホビロコメツキモドキという昆虫を取り上げます。ニホンホホビロコメツキモドキがどのようにしてタケの空洞内に酵母菌を植え、育て、守り、食べ、次世代へ引き継ぐのか、たっぷりとお話します。

講演03



言葉を持つ鳥 -シジュウカラ-

鈴木 俊貴／東京大学大学院総合文化研究科

ダーウィン以来長年にわたって、言語はヒトに固有であると考えられてきました。もちろん他の多くの動物も求愛や警告のために様々な鳴き声を発しますが、これらは単なる感情の表れにすぎないと考えられてきたのです。それに対して私は、身近な小鳥シジュウカラが、鳴き声を使い分けて天敵の種類を示したり、それらを組み合わせることでより複雑な情報を伝えたりしていることを発見しました。単語や文法といった言語能力は、ヒトに固有なものではなく、実は動物たちにも進化しているのかもしれない。本講演では、上記の研究内容を紹介しながら、野外観察や行動実験から動物たちの豊かな言語世界にどのように迫れるのかお伝えすることができれば幸いです。